
休息の華

紅月 時夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

休息の華

【Nコード】

N15230

【作者名】

紅月 時夢

【あらすじ】

仕事が終わったクラウドの元へかかってきた一本の電話。それは十年來の友、レノからだった。

復興を続ける街・エッジに夜の帳が落ち始める中を、金髪のツンツン頭が特徴の彼、クラウド・ストライフは歩いていった。

彼の仕事は荷物の配達で、普段は愛車であるバイクのフェンリルに乗って仕事をしているが、今日の仕事は近場だったために歩いて向かっていた。仕事は既に終わっているため、後は家へと帰るだけだ。

「明日は久しぶりに仕事が入ってないから、休みにするか」

急ぎの仕事が入ったとの連絡もない。ならば休みにしてもいいだろう。

その時、携帯が鳴り響いた。

もしや仕事だろうかと少し残念に思いながら画面を見ると、そこには見慣れた名前。自然と弛んだ口元はそのままに電話に出る。

「何の用だ？」

『おいおい、十年來の友達にそれは酷いんじゃないかな、と』

「悪い。で、何の用だ？」

レノ。

電話の向こう側で、いつもの飄々とした笑顔を浮かべているだろうことが容易に想像がつく。それほどまでに、彼らの付き合いは長い。

『クラウド、今から暇か？』

「仕事はもう終わったが。今日は遠出の仕事が無かったからエッジにいる」

『そりゃ都合がいいぞ、と』

「？」

話しがいまいち見えず、クラウドの頭には“？”が飛んだ。そのことに気付いたのかどうか、電話口から聞こえてきた笑い声に続き、本題が聞こえてきた。

「……わかった。今から行く」

笑顔を浮かべて、クラウドは答える。レノと少し話をするとう電話を切り、今まで家へと向けていた足の向きを変えた。

「久しぶりだな」

そして、家へと今夜は遅くなるという電話を入れるため、再び携帯を手を取った。

歩き慣れた道を歩いて行くと、見慣れた建物が見えてくる。登り慣れた階段を上がり、握り慣れたドアノブを掴んでドアを開く。

「レノ、来たぞ」

相変わらず生活感があまり見えない部屋。その部屋の奥から入って来いとの声が響いてくる。

コツコツと鳴る足音が部屋へと向かうほど、奥から香ってくる酒の薫り。どうやら既に相当の量を飲んでいいるらしい。もしかすると今夜は帰れないかもしれないと考えていると、いつの間にか部屋へと入っていた。

「よ、クラウド。久しぶりだな、と」

「そうだな。三週間ぶりってところか」

テーブルや床の上に転がっている、ビールやチューハイの空き缶。クラウドの予想通りその数は多く、既に十数本空いている。まだ袋に入っているものが三十はあるだろうか。それに加えて、ワインのビンが十本はある。まだ空いていないが、その内に空くことだろう。レノは缶ビールを持ち、ソファアに座っていた。ソファアのすぐ隣には乱雑に脱がれたダークスーツが置かれている。彼はいつものようにカッターシャツを第三ボタンまで開け、涼んでいた。

「……飲むペース早くないか？」

隣に腰を落ち着けると、持ってきた袋をテーブルの上へ置く。

「そうでもないぞ、と。俺はいつもこんな感じだ」

「そうだったか？」

「そうだぞ、と。で、それは何だ？」

紅髪を揺らしながらレノは体を起こすと、缶チューハイや缶ビールをクラウドへ手渡す。それを受け取りながら、クラウドは袋の中身

を取り出した。

「つまみ、買ってきた」

「お、サンキューだぞ、と」

早速レノはクラウドが買ってきたチーズやささみなどのつまみの袋を開け始める。それに見ながら、クラウドは缶ビールを煽った。

「クラウド、最近仕事の方はどうだ？」

チーズをくわえたままクラウドを振り返るレノの表情は明るく、素面同然だ。彼が酒にどれだけ強いかわかる。

「客からの依頼はほぼ毎日入ってる。遠出で一週間くらいエッジにいないなんていうのはざらだな。まあ、あんたもだろ？相変わらず生活感の無い部屋だ」

「くくつ、言うなあ」

一息に手にしていた缶ビールを飲み干すと、レノは近くにあったチューハイへと手を伸ばした。酒を煽るその様を何度見ただろうかと、クラウドは思いを馳せる。

「最近違法な薬の売買があつてな、社長の命令でここ二週間くらいエッジの廃墟をしらみ潰しに当たってたんだぞ、と。おかげさまで寝不足に過労。飲まなきゃやってられないぞ、と」

「タークスは相変わらず大変だな」

「そりゃあ、これが総務部調査課の仕事だからな。街の復興の手助けが今の社長の目的。その目的に沿うのが、俺たちタークスだぞ、と」

ニカツと笑うレノの表情がどこか幼く見えるのは、恐らく酒のせいだ。彼は酒が入るとどこか素直になるところがある。クラウドの前では特にそれが顕著だ。付き合いの長い友人だから気が抜けるのだろうか。

「それで、ヤクを扱ってた奴らは捕まえたのか？」

「もちろんだぞ、と。俺とルードでアジトを押さえたから大丈夫だろ。出回った方はツオンさんとイリーナがやってる」

「なるほど、アンタは体を休めろってことか」

「当たり前だぞ、と」

レノの言うルード、ツオン、イリーナの三人もタークスである。ツオンはタークス主任で上司に当たり、ルードはレノの良き相棒、イリーナは後輩になる。

話とともに酒は進み、大量にあった缶ビールも缶チューハイもつまみも無くなり、二人の口の中はワインで満たされていた。

「いつも思うけど、俺たちって酒強いよな」

「だな、と。さすがに仕事で疲れてる時は回りが早いけどな」

「……気のせいじゃなかったか」

「何がだ？」

首を傾げるレノにクラウドはため息を吐き出した。

「アンタ、酔ってるだろ？もう半目だ。眠いんじゃないのか？」

「いや、眠くはないぞ、と。寝ちまう可能性は無いが、眠くはない。それに、そういうお前だって酔ってきてるくせに」

そう言いながらワインを煽るレノはまだ飲むことを止めるつもりは無いらしく、空になったグラスへワインを注いだ。

「連絡入れて正解だったな」

ポツリと呟いたクラウドの言葉は彼の耳に届かなかったらしく、レノは口にワインを含んでその味を楽しんでいる。

話の最中レノに断り、クラウドは家へと連絡を入れていた。今夜は帰れそうに無いと。やけ酒をするレノを一人放っては帰れない。どうせ明日は仕事を休みにするのだ。構わないだろう。

「クラウド」

「何だ？」

肩へ寄りかかって来たレノを押し退けるようなことはせず、ただ問い返す。彼がこのようにしてくる時は、決まって仕事で何かがあった時。だからクラウドは、レノがこの行動をしてきた時は何も言わず、されるがままになっている。

クラウド自身も人のことは言えないが、レノもあまり人に対して胸の内をさらすようなことはしない。そんな二人だからなのか、付き合いが長いからなのか。いつの間にか酒をかわす時に、互いにだけ胸の内をさらすことが多くなっていた。

「クラウド」

レノはこうしてよく、何も語らずに名を呼ぶことがある。それは仕事で暗殺だのなんだのと、人殺しをした時だとクラウドは知っている。先ほどの話からわかるように、薬を扱っていた奴らのアジトを潰した時にたくさん殺したのだろう。仕事と割り切っても、遣る瀬ない思いは残る。

クラウドも昔は兵士だった。人々の中では殺しなど当たり前に起きているようなものだった。三年前に星を守るための旅に出た時にも、

多くの人を手にかけた。クラウドの手も血に汚れていて、レノもまた同じ。それを知る二人は、相手を責めるようなことはしない。

「クラウド……また、俺はやるんだろうな」

「そうだな」

「でも、タークスにいることは俺の生きがいで、誇りだから、辞められないんだぞ、と」

「知ってる」

「結局、俺の手はずっと汚れてくんだろうな」

「そうかもしれない」

いつも交わされる問答に意味は無く、それは儀式のようにその空間に存在する。

わかっていることを敢えて問うことに意味は無く、ただレノは問い掛ける。それをわかっているクラウドは、無責任なことは言わず、曖昧に返事をする。しかし、レノにとってそれで良かった。きちんとした答えなど、彼は望んでいないのだから。

「俺たちは生きるために色んなものを犠牲にしてきた。たくさんの命を踏み台にしてきた。だから、生きて償うしかないんだ」

「だな」

だから生きよう。

クラウドの言葉に、レノは仄かに微笑んで頷く。
クラウドは空になったグラスになみなみとワインを注ぎ、一息にすべてを煽った。

「飲み過ぎ、だぞ、と」

「アンタもだろ？」

「そりゃそうだ」

酔いが回ってきたらしく、二人の瞳が自然と閉じていく。

「レノ……アンタ、明日仕事は？」

「休み……だぞ、と」

「じゃあ、明日は起きたら掃除………な」

「りょーかい……」

そして二人は互いに寄り掛かりながら、ソファアーの上で眠りにつく。
悲惨な現実とは違う幸せな夢に一時の安らぎを感じながら、彼らは深く深く堕ちていった。

e n d

（後書き）

珍しくレノとクラウドで友情小説です。CPではないですよ！ない
と言い切ります！

でも……なぜでしょう。もっと明るく二人は酒を酌み交わすはずだ
ったのに、話が進むに連れて凄く重い話になってしまいました（汗）
もっとほのぼのになるはずだったのになあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1523o/>

休息の華

2010年10月10日22時42分発行